

映画は「寄り道」が楽しい

ある場面に映り込んだ風景、流れる音楽、登場人物の言葉遣い——
その一つひとつに目を向けると、映画は一段と楽しくなる！
長く映画評論を続けてきた川本三郎さんと、平川克美さんに
その醍醐味を聞いた。

評論家

川本三郎

●かわもと・さぶろう 1944年東京都生まれ。『あの映画に、この鉄道』『映画の中にある如く』（ともにキネマ旬報社）など著作多数。

平川 僕は川本さんの本を愛読してきましたんですが、いちばん衝撃だったのは、なんといつても『銀幕の東京映画でよみがえる昭和』なんです。

川本 ありがとうございます。以前、『東京人』で「映画の中の東京」という対談をした大瀧詠一さんも、そう言うてくれました。

平川 大瀧さんとは僕も少し親交があったて、『銀幕の東京』の影響で、

成瀬巳喜男の『秋立ちぬ』と『銀座化粧』、それから小津安二郎の『長屋紳士録』のロケ地を特定したとおっしゃっていました。『銀幕の東京』では、消えた東京に言及し、あるいはロケ地を荷風の言葉と結びつけるなど、一本の映画をこれほど幅広い視点で批評できるものなのかと驚きました。

川本 普通は監督論や映像論、俳優

論を語るのが映画評論なんです。私の場合は寄り道ばかりで（笑）。平川 でも、それが楽しいんですよ。ああいう映画の見方を川本さんに教わったわけですが、そのうち『日本すみずみ紀行』のような旅のエッセイにも影響されるようになって、川本さんが訪ねた場所は、けっこうたどっているんです。岡山では、牛窓みづしや三石みつしなんかも訪ねました。

川本 三石は小津の『早春』のラストシーンに出てくる町ですね。『東京物語』の撮影を尾道でやっていますから、尾道と東京とを行き来するときに、山陽本線の車窓からあの町を見つけたのではないかと思います。

「断腸亭日乗」のなかで、荷風は堤の上から見た放水路のスケッチまでしているんです。あの日記の影響を受けて、小津はあの場所でロケをしたんだと確信しました。

『東京物語』は、小津の中ではいちばん好きな映画です。笠智衆の息子夫婦が医院を開いているのが堀切なんですが、尾道から出てきた東山千栄子が孫と遊ぶシーンがあって、あれは東武電車の堀切駅近くにある荒川放水路の堤の上で撮っているんです。フィルムアート社から出ている

平川 荷風については『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』を書かれています。荷風は、川本さんのなかではまったく別のところであって、それが荒川放水路あたりでつながっていった？

『全日記 小津安二郎』を読むと、小津は『東京物語』を撮っているところに中央公論社から出た『荷風全集』の「断腸亭日乗」を毎日のように読んでいます。そこではたと膝を打ったのは、『東京物語』のあの場所は、荷風が歩いたところだということ。

川本 そうですね。小津は江東区出身ですから、荒川放水路のあたりになじみがある。それで、「断腸亭日乗」を読んだときに「荷風も好きだったのか！」と気づいて、放水路に注目したんだと思います。

平川 成瀬はどうですか？僕は、川本さんは成瀬がいちばん好きだと思っ

平川 成瀬はどうですか？僕は、川本さんは成瀬がいちばん好きだと思っ

平川 おっしゃる通りで、あの貧乏

くさいところが好きなんです（笑）。ベストは『おかあさん』で、子供のころに観て以来、大好きです。『秋立ちぬ』も好きなんです。一九六〇年に公開された際、なんと黒澤明の『悪い奴ほどよく眠る』の添えものとして出てきているんですね。成瀬のほうが先輩なのに、後輩の映画の添えものを平気で作ってしまうのがすごいし、しかもそれがいい映画になっているから、またすごい。

平川 あとお聞きしたかったのが、川島雄三の映画についてなんですが、川本 川島の中では、『洲崎パラダイス赤信号』がいちばんです。『銀座二十四帖』も、あの時代の銀座をよくあれだけ撮ったなあと思います。川島は青森県の下北半島の出身なんですけど、なんでこんなに東京が好きなんだろうと思っちゃうくらい、東京をよく撮っていますよね。